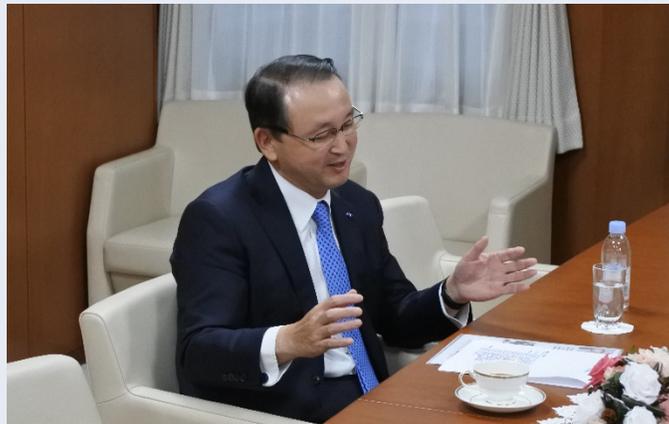


2019.1.1

今回お会いしたのは、五洋建設の清水琢三社長(昭和56年・港湾研究室(現:海岸・沿岸環境研究室)卒業)。清水さんは修士課程修了後五洋建設に入社し、2014年より同社の社長を務められています。また、本専攻講義「シビルエンジニアの活躍する世界」では開講年より毎年学生に講義をいただいています。今回は飯田橋の五洋建設本社にて、これまでの経歴やこれからの建設業界についてお話を伺いました。



清水琢三さん 五洋建設(株)にて

技術屋から経営者に

技術に携わった若手時代

私の経歴はゼネコンの社員らしくない珍しい経歴なんです。ゼネコンに入ると普通は最初は現場に行くことが多いのですが、大学院の港湾研をでて、会社に入って十数年はずっと学生のころと同じような仕事をしていました。波や流れ、漂砂、地形変化などの海岸工学の専門知識を使って、社内とお客さんに対して問題解決をするという技術的な仕事をしていました。現場で計測をしたり、その計器を自分たちで作ったり、最先端のことをして論文を出したりもしていました。研究そのものというよりか、最先端の研究成果を使って実際の現場の課題を解決するという上流側の仕事です。発注者や大学の先生とも共同で論文を書いたりしていました。30代ごろまでに60編以上論文を書いています。もともとそういう仕事をしたいと思っていたのですが、研究室の先輩とのつながりでたまたまその部署に配属されることになりました。4年後ぐらいにはチームを引き継いで10人ぐらいを動かすということになりました。技術部門にいたからといって現場と遠いところの仕事をしていたということではなく、現場の問題を専門知識を使って解決するという仕事です。それでいくらか儲けが出たとかいうこともやっていました。

～清水さんの経歴～

年	経歴
1958年	京都府生まれ
1981年3月	土木工学科港湾研究室卒業
1983年3月	修士課程修了
1983年4月	五洋建設(株)入社 土木設計部
1995年4月	技術研究所
1996年10月	企画部
1999年9月	土木設計部
1999年12月	東北支店 大間原発港湾工事
2001年6月	東北支店 建設部部長
2001年10月	経営管理本部 経営企画部長
2008年10月	中国支店 副支店長
2009年4月	名古屋支店長(執行役員)
2012年4月	土木営業本部長(常務執行役員)
2014年4月	代表取締役兼執行役員副社長
2014年6月	代表取締役社長兼執行役員社長

政治や世の中に興味があった

もともと経営のこととかビジネス書にも興味があって、今でも定期購読している経済誌がいくつかあります。それは世の中や政治に興味があったからで、土木でなければ工学部には来なかったかもしれないですね。小学生のころは政治や社会に興味があって、政治とか選挙とかを見ているとすごく楽しかったです。そういった社会科学系に興味があったので、中学の頃は早稲田の政経に行こうなどと考えていました。うちは大工の家系だったので、土木や建築にはなじみがあったのですが、スケールが大きく、自然とかかかわるところが面白いと思って土木を選びました。高校生の時、「国土の変貌と水害」という高橋裕先生の新書を読んで、「これだ」と思いました。戦後水害が多発したのは、都市化が進んで、山が開発され、昔は水につかってもよかった田んぼの遊水地がなくなったからだ、という話が書かれていてこれは面白いなあと思いました。

会社の中でずっと同じことをやり続けるというのは難しいですから、コンサルタントや大学の先生などとして「いつかは独立も」という考えはありました。若いころは技術的な仕事をやって、それがある程度まとまって来てから会社全体のこと、経営のことを勉強しないかということで企画部に移りました。

経営にかかわる仕事へ

今の仕事には技術者としての経験と社会に興味があったことの両方が役立っていますね。いろいろな現場を見ながら、その上流側の研究もしてきた技術者だから現場でどんなことをやっているのか、何が問題なのかが分かるんです。私が企画に携わったのはバブルがはじけたあとの1996年から2008年にかけて、建設業界全体が苦しい時代でした。それでも、この業界には技術だけでは勝ち残れない、人間臭い部分があって、人がやることだから面白いと思いました。経営企画部にいると会社がどうやって利益を出しているのか、どこで無駄なことをしているのかが分かりますよね。理系だから、物事を論理的に考え、分析する力もあります。統計データの変化を分析すると、何が関係しているのか、だれがやったのかが分かるんです。やっぱり世の中から見てもおかしいことをやっているとうまくいかなくなるんです。正論だけではダメですし、一気に変わることはできませんが、少しずつ良くしていこうとみんな動きました。そうやって技術屋ですが経営に近いところの経験をしました。

2019.1.1

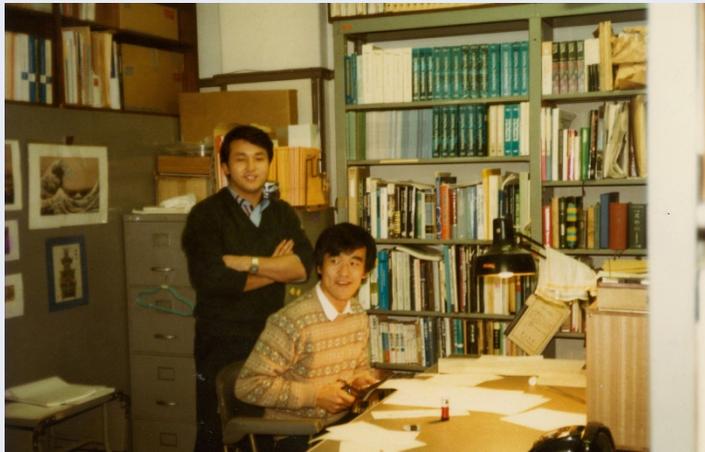
学生時代

土木工学科の同期

今年も23人集まる同窓会が開かれます。派手ではないんですが毎年毎年続けてやっているんです。石井大臣、森事務次官、金尾水資源機構理事長、JR東日本・JR東海の役員、佐藤先生などみんな様々な分野で頑張っていますよね。東大のいいところはゼネコンや役所に偏らず幅広く分散してそれぞれのところで活躍していることだと思います。金尾さんは中学から大学院まで12年間の同級生で、金尾さんの教養の時の同級生が佐藤先生でした。どういうわけか佐藤先生とは仲良くなって、土木に進学してからはお互いの家によく遊びに行ったりしていました。



東大相撲部時代の清水さん(右)



清水さん(左)と佐藤慎司教授(右)

私は東大相撲部の3期目で、清水英範先生は1年下なんです。当時は部内に清水が3人もいました(笑)。英範先生は都市工学科に行くと言っていたのですが、私が「ハードのことも勉強しておきなさい」と勧誘して土木に来ることになりました。

卒業してから30歳ぐらいまではしょっちゅう東大に行っていました。土曜日は研究室のゼミに参加していて、当時は外の大学の先生なども参加されていました。

修士の2年間は結構役に立ちますよ。会社に入ってから仕事のやり方なんて誰も教えてくれないけど、2年半で卒論・修論をやった時の雰囲気分かれば、自分でいろいろやるというのが覚えることができます。優秀な先生方がどんなふうか考え何をやっているかを、当時はコーヒーを飲みながら集まって雑談したり厳しい議論をしたりして学びました。理系の人には絶対に大学院に行くべきだと思います。

これからの建設業界

最先端技術と部門間連携

今はi-Construction, ICTの時代です。栈橋の傷みをラジコンボートで撮影しAIで判定できるようになったり、現場では全員iPadを持ってデータをみんなで共有したりする、そういう時代になっています。三次元で図面を作るBIMは、シンガポールではすでに義務化されており、五洋建設では現地の技術を日本に導入するために人材交流などを進めています。

建設業は現場ごとに地域ごとにもバラバラで、個性豊かな集団でしたが、これからはもっと総合力を発揮すべきです。ちょっと人に聞けば失敗しないということもたくさんあります。海外では土木と建築の区別はないんです。最近土木・建築・海外の各部門が力を合わせて連携をするようにしています。

「良質な社会インフラの建設こそが最大の社会貢献」

出来上がったものは発注者が喜ぶだけでなく使う人の立場に立って使いやすく壊れにくいものでなければなりません。それが提案できるのがゼネコンの仕事ですし、それができる会社は信頼されます。私が考えた言葉ですが「良質な社会インフラの建設こそが最大の社会貢献である」というのを標榜して事業をやっています。みんなが使うから、不正があっては困ります。

日本に住んでいる以上災害はなくなるしないし、その中で経済を維持していくにはインフラを造り替えていかなければいけません。具体的にモノを造って解決するということに携わる人に増えてほしいと思っています。



貴重なお話ありがとうございました。